

マケドニア語人称代名詞研究

— 言語地理学的視点より —

中 島 由 美

はじめに

印欧語族スラヴ語派に属するマケドニア語は、隣接するブルガリア語とともにスラヴ語派の中でも特異な性格を有している。その多くはいわゆるバルカニズムに関係する特徴と言ってよいが、スラヴ諸語の基本的性格である屈折語尾による格表示システムが崩壊し、前置詞を多用する分析的統語システムへと変化したことから、これに連動して発達した用法が重要な部分を占めている。中でも人称代名詞に定着した新たな用法はとくに注目すべきもので、この発達過程が明らかになれば、分析的統語システムへの移行過程の解明につながるはずである。筆者はこうした観点から人称代名詞用法に関心を持って取り組んできたが、とくに方言研究の立場からその地域差に注目している。本稿では言語地理学的手法により、方言特徴のさまざまな分布図を観察・分析することによって得られる知見を示し、言語変化過程を解く仮説につなげたい。これまで部分的に発表してきた成果の統合を目指すという展開の都合上、既に発表した論考と一部重なる部分もあるが、言語地図を電子化によって一新し、分析を整理統合した上で改めて論ずるものである。

1. マケドニア語人称代名詞の用法

1.1

ここで取り上げるマケドニア語人称代名詞の用法について、概略を紹介しておきたい。

表1は北側に隣接するセルビア語標準語の体系である。この体系の特徴として短形／長形の区別を一部の格に持つことがあげられるが、(1)短形は非自立形でエンク

表1 セルビア語人称代名詞

数		単 数				複 数		
人称		1	2	3		1	2	3
(性)				男/中	女			男/中 女
主格		ja	ti	on/ono	ona	mi	vi	oni/ona
生格	長形	mene	tebe	njega	nje	nas	vas	njih
	短形	me	te	ga	je	-	-	ih
与格	長形	meni	tebi	njemu	njoj	nama	vama	njima
	短形	mi	ti	mu	joj	nam	vam	im
対格	長形	mene	tebe	njega	nju	nas	vas	njih
	短形	me	te	ga	ju, je	-	-	ih
造格		mnom	tobom	njim	njom	nama	vama	njima
前置格		meni	tebi	njemu	njoj	nama	vama	njima
呼格		-	ti	-	-	-	vi	-

表2 マケドニア語人称代名詞

数		単 数				複 数		
人称		1	2	3		1	2	3
(性)				男・中	女			男・中・女
基本形		jas	ti	toj/toa	taa	nie	vie	tie
直接目的	長形	mene	tebe	nego	nea	nas	vas	niv
	短形	me	te	go	ja	nè	ve	gi
間接目的	長形	meni	tebi	nemu	nejze	nam	vam	nim
	短形	mi	ti	mu	i*	ni	vi	im

* 通常の i と区別するための表記

リティクとなり、従って文頭に立つことはできない、(2)長形は自立形で文頭にも立つことができ、また前置詞に接続する形でもある。これに対して表2はマケドニア語標準語の体系で⁽¹⁾、基本形のほかに直接目的/間接目的の2形を区別するが、これらが形のうえでセルビア語の生格・対格形、および与格形と起源を一にするものであることは一見して明らかである。しかし、両体系の活用方法には大きな違いがある(グロスは右【 】内に簡略に示す。本稿の議論に直接関係しない要素は意味のみとする。表記については後注を参照のこと⁽²⁾)。

- 1) Ja volim njega. 【私は・好きだ・彼を(3人称男性単数対格長形)】
- 2) Ja ga volim. 【私は・彼を(3人称男性単数対格短形)・好きだ】
- 2)b Volim ga. 【好きだ・彼を(同上短形)】

1), 2)のセルビア語では、「私は彼を好きだ」と言うのに「彼を」にあたる3人称単数・男性 on の対格形として、長形の njega, 短形の ga いずれも可能であるが、1)は強調文となってしまう、通常は2), 2)bが用いられる(短形はエンクリティクで文頭に立てないため語順に制約がある。2), 2)bで文意は変わらない)。

- 3) Jas go sakam. 【私・彼を(3人称男性単数直接目的短形)・好きだ】
 3)b Go sakam. 【彼を(同上短形)・好きだ】
 4) Jas go sakam nego. 【私・彼を(同上短形)・好きだ・彼を(3人称男性単数直接目的長形)】

上の2), 2)bのセルビア語に対応するマケドニア語は3), 3)bとなるが、こちらには4)のように短形と長形を重ねて使う用法があり、重複しても強調構文にはならないという特徴がある。この用法を「人称代名詞二重使用⁽³⁾」(以下「二重使用」とする)と称し、次のように名詞一般にも適用される(短形は文頭に立つことができるが、通常動詞の直前が定位置となる。3), 3)bで文意は変わらない。二重使用なしで長形だけを用いることはできない)。

- 5) Jas go sakam Pero. 【私・彼を(短形)・好きだ・ペロ(男性名)】
 6) Jas go sakam pejačot. 【私・彼を(短形)・好きだ・(その)歌手を】
 7) Jas sakam makedonski pejači. 【私・好きだ・マケドニアの歌手(冠詞なし)】

5)は固有名詞と、6)は定冠詞(後置冠詞として名詞の末尾に接続する)が付いた場合で⁽⁴⁾、特定の対象に限定される場合に短形を重ねて用いることが義務化している。このようにマケドニア語人称代名詞短形は語彙的意味を失い、文法化によって格明示機能のみを担うようになった。その結果3)のような短形だけの文は不完全文として捉えられる。ちなみに、7)のように名詞が特定のものに限定されないとき(「マケドニアの歌手は(誰でも)好きだ」)は二重使用が適用されない。

次に、直接目的(旧対格)形と対比される間接目的(旧与格)形の例を示す。

- 8) Jas mu rekov nemu. 【私・彼に（3人称男性単数間接目的短形）・言った・彼に（同長形）】
- 9) Jas mu rekov na Pero. 【私・彼に（短形）・言った・前置詞「～に」・ペロ】

9)のように間接目的構文で人称代名詞でなく名詞を用いるには、前置詞 na が必要となる。

1.2

9世紀末に現マケドニア～ブルガリア地域の口語を母体として成立したとされる古教会スラヴ語の体系に遡ってみても、この地域の言語がもと現セルビア語同様7格を区別する体系に近いシステムを持っていたことは明らかである。14世紀以降長くトルコ支配下にあったバルカン半島で、急激な言語接触が言語類型上の変化を起こしたと推定され、格システムの崩壊が人称代名詞短形の文法化を定着させたと考えられる。14～20世紀始めまでの間、口語を母体とする文語が発達する余地はなく、言語変化が進行したと考えられる16～17世紀ごろの文献資料も望めない状況で、唯一変化の跡付けを探る資料があるとすれば、それは方言の中に求めるほか



図1 「マケドニア方言地図帳」地点（共和国領域内のみ）

はない。

筆者が依拠する資料であるが、マケドニア語圏においてはボジダル・ヴィドエスキらによって1960年代に共和国内、及び周辺国のマケドニア語話者住民居住域を含む300地点を越える大規模な調査が実施されている。その後の急激な近代化、標準語教育の普及、マスコミュニケーションの発達等を考えれば、この調査結果に匹敵する資料は求めうべくもなく、同レベルの調査を再現することは既に不可能と思われる。調査項目は音韻、文法、語彙など幅広い分野をカバーした全35章からなり、各章が50以上の項目からなっている。この調査結果が音韻項目や一部の語彙を除きまだ十分に地図化されていないこともあり、筆者はデータ整理と地図化に独自に取り組んできた。幸いにも「代名詞」に一章が割かれ、関連する85項目が含まれている⁽⁶⁾。

地図化については、電子化により大きな進展があったが、付随する問題について一言述べておきたい。方言事象の分布を解釈することで言語の時間的変化を読み取ろうとする言語地理学的手法を有効に活用するためには、多様な言語地図によって地理的分布を効果的に可視化することが求められる。膨大な作業を軽減し精密化するためにも、言語地図作成の電子化は長年望まれ、さまざまな挑戦が行われてきた。技術の向上は確実に進んでいるが、ある程度の質の地図作成には費用面や、技術習得が必ずしも容易でない等の問題がまだ十分に解消されていない。筆者がここで利用するのは国立国語研究所による地図作成プログラム lms-aip である⁽⁷⁾。『日本言語地図』の基礎を作ったわが国言語地理学研究的蓄積が活かされており、汎用性の高い技術を活用しているので、どのような地域の方言研究にも適用できる。その反面、基本技術を市販のソフトに依拠しているため更新への対応などが課題である。また、同一ソフト上で統計機能を併用できない。方言研究の蓄積を継承していくためにも、今後の技術面の発展に注目したい。

1.3

本論に入る前に、マケドニア語人称代名詞に関して筆者が設定する問題点について、要点をまとめておく。

- (1) 標準語体系では、すべての人称代名詞に均等に二重使用が定着しているように見えるが、方言分布をみると定着のレベルは代名詞ごとにかなり異なる。言語地理学的な発想からは、この地域差こそが重要な情報源と捉えられる。
- (2) 当該領域内において最も重要な分布上の対立は、間接目的構文における二重

使用と、前置詞使用の定着度にある。

- 10) Jas mu rekov nemu. 【私・彼に（3人称男性単数間接目的短形）・言った・彼に（同長形）】
- 11) Jas mu rekov na Pero. 【私・彼に（短形）・言った・前置詞「～に」・ペロ】
- 12) Jas mu rekov na nemu. 【私・彼に（短形）・言った・前置詞「～に」・彼に（長形）】
- 13) Jas mu rekov na nego. 【私・彼に（短形）・言った・前置詞「～に」・彼に（人称代名詞男性単数直接目的長形）】

即ち、標準語体系では人称代名詞のみ使用の場合は男性単数形の旧与格長形をそのまま用い、名詞を語彙表示部分に使用する場合は前置詞naを用いる(10), 11))。しかし方言分布には12)「前置詞+旧与格形+旧与格短形」、13)「前置詞+旧対格形+旧与格短形」のような構文もまとまった領域をもって現れ、その分布状況から、二重使用構文と前置詞構文の間のせめぎ合いが見てとれる。また、前置詞構文定着と並んで、旧対格形の代名詞直接目的長形negoが「共通変化形」としての機能を獲得し、旧与格形nemuに取ってかわる様子が観察できる。

(3) 以上より、筆者が設定する課題の中心は、二重使用と前置詞使用それぞれの間の発達過程、両者発達の前後関係、それらと共通変化形形成の関係、等の解明に絞られる。

2. 「マケドニア方言地図帳」データによる言語地図

2.1 1人称・2人称人称代名詞単数形

以下、上記問題点の設定に従って分布図を見ていく。「マケドニア方言地図帳」調査では、人称代名詞について、すべての性・数の基本形を確認した上で、「～を見た」「～に言った」という構文に代名詞をどう用いるかをきいている。形態情報主眼のようであり、二重使用の有無について踏み込んで確認しているわけではない。従ってここで示す分布図は、例えば「二重使用を義務的に用いるか否か」とか、「前置詞は全く使わないのか」といった使用実態の確認を経たものではないが、インフォーマントから得られた第一回答には意味があると見なす。

まず1人称, 2人称代名詞であるが, 両形ともに単数形では標準語体系と同じく長形で旧与格形が完全に消滅している(分布図省略)。この2形の使用頻度を考えると, mene/meni, tebe/tebi において後者の与格形が失われて前者の旧生格=対格形 mene, tebe に収束してゆくという事態がまず先行し, その結果与格/対格の別が曖昧になるのを防ぐため, 格関係の念押しとでもいうように短形の付加が進んだ, という推測が可能になる。生格/与格の同一化はバルカニズムの一現象とされているが, コミュニケーション上の重要度からして, 与格「誰に」/対格「誰を」の区別が曖昧となる事態は望ましくない。とくに対格(直接目的)が重要であることは, セルビア南部から始まる格システムの単純化した地域でも, 対格の残存度が高いことでわかるし, より一般的な例としては英語に於ける I/me の対立などもその例と言えよう。スラヴ諸語には男性名詞の屈折パターンに2つのタイプがあり, 人間・動物を表すものでは生格が対格と同形に, それ以外では主格と対格が同形となる。人称代名詞は前者にカテゴライズされ, 生格=対格となる。いまここで生格=与格の同一化が進行したとすると, その影響は当然対格にも及ぶであろうから, コミュニケーション上の混乱を避けようとの意図が働いても不思議はない。

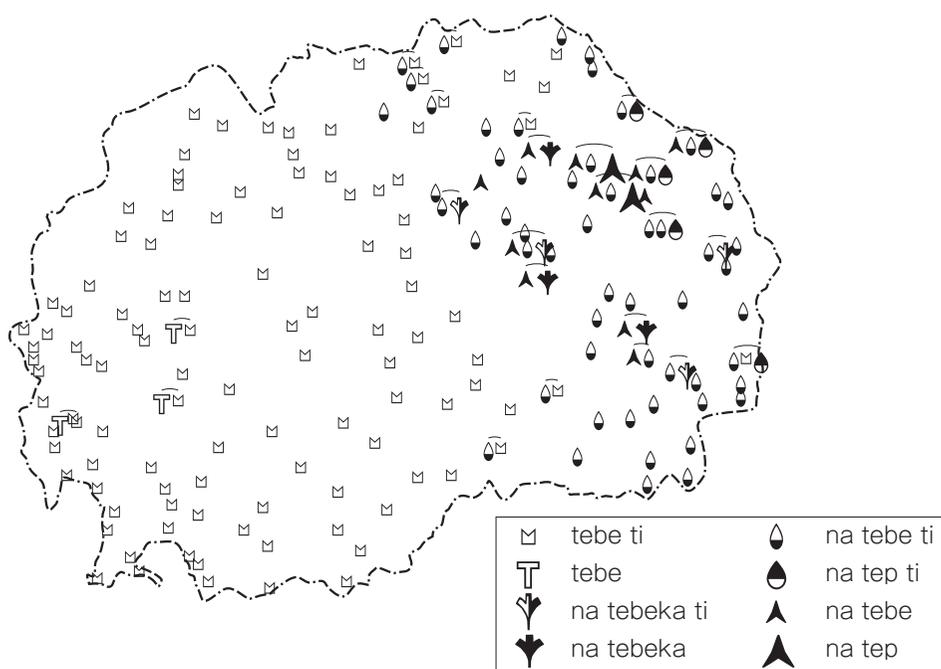


図2 2人称単数・直接目的構文の構造「お前に(言った)」

さて、2人称単数形の分布について詳しく見ていくと、直接目的構文では二重使用がほぼ安定して全領域に定着しているのに対し（分布図省略）、図2の間接目的構文では前置詞使用が東部方言領域にまとまって分布していることがわかる。即ち、二重使用は西部地域で、まず旧対格構文に適用されるようになった。対格（直接目的）構文は生格／与格同一化の影響、及びそれに対する防御のために、先行して短形付加が進んだのである。しかし与格（間接目的）構文では、その時期には長形や一般名詞の与格形がまだよく認識されている段階にあり、また生格／与格同一化が進行しても対格構文ほど深刻な曖昧化が予測されなかったのか、短形の付加はよりゆっくりと定着していった。西部地域で二重使用のペアが安定したのに比べ、中央～東部では不安定なうちに前置詞の強い影響を受けたため、二重使用に前置詞をかぶせて格機能の認識を明確化したのではないだろうか。しかし、na tebe tiが、前置詞を伴わない tebe ti に連続して分布しているので、前置詞による格関係の明示化は二重使用の定着の後に起こったと推定できるのである。

なお、図2は分布があまり煩瑣でないため、長形の形ごとに示してみたが、長形 tebe について tebe ka, tep 等も見える。前者は強調やとりたて、もしくはリズムを整えるために使われる接尾辞 -ka がついたもの、後者は語末子音が無性化したものである。いずれも全域に一般的な特徴で構文の発達に直接かかわるものではないが、この項目で些かの地域的まとまりが見えているのは、アクセントと関係するかもしれない。この問題については後に少し言及するが、ここでは問題としない。

2.2 3人称単数男性

2人称単数について上で設定したポイントに従って観察してみたが、同様に3人称の場合を見ていく。1人称、2人称と異なり、3人称では旧与格形 nemu が標準語に定められている。しかしながら筆者が実施した数地点での談話調査でも、間接目的構文で対格起源の nego に前置詞を伴う形式が広く使用されていることがわかっていく。nemu/nego の違いと二重使用／前置詞の違い、これら両者の関係は分布からどのように捉えられるのだろうか。

図3は間接目的構文の構造を簡略にまとめて示したものである。2人称の場合より二重使用を重ねて前置詞を使用する領域が広く、また、前置詞使用域の中央部に短形の重複を伴わない前置詞のみの形式が数地点見えている。図4は、同じく間接目的構文でとくに長形の語形に注目したものである。両者の分布から、二重使用はまだ長形の格区別が完全に失われていない段階で短形を重ねる方式が発達し、その

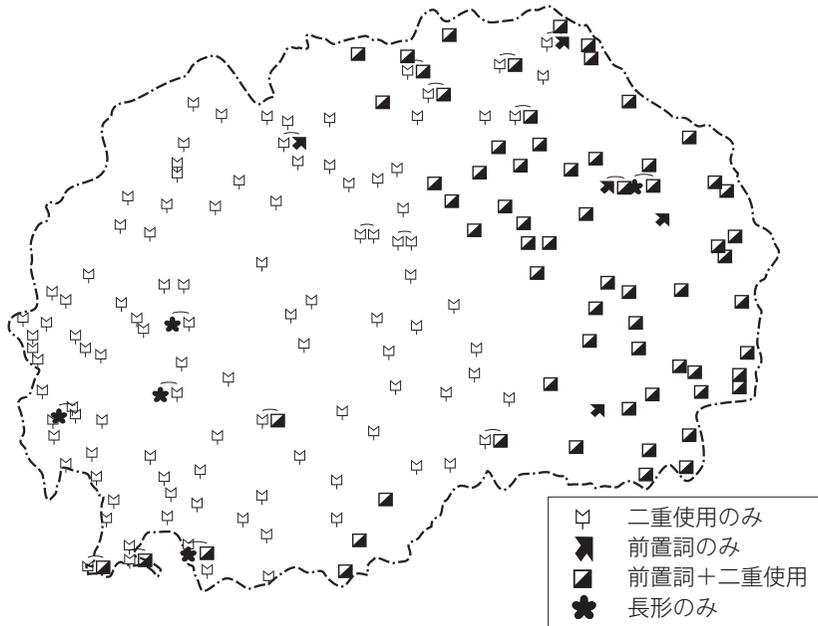


図3 3人称単数男性・間接目的「彼に(言った)」の構造

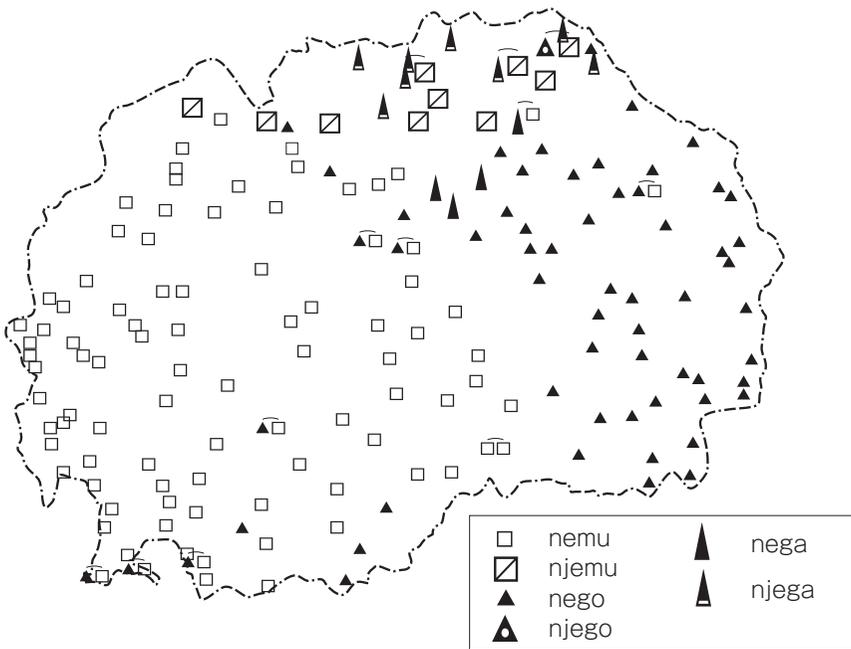


図4 3人称単数男性：間接目的「彼に(言った)」の長形

あとで東部および南部側の前置詞使用勢力と拮抗したとみられる。旧与格形の長形で構成された二重使用に、さらに前置詞が重ねられたわけである。前置詞が先に定着してからわざわざ旧与格形の長形を用いて新たに二重使用構文を形成する、ということは順番として想定しにくく、二重使用が先行すると考えたい。

北部に旧与格形でセルビア語に近い *njemu* がまとまって分布しているが、北部方言領域では一般名詞の対格形残存もあり、格区別の認識がその他の地域に比べ根強いと見られる。旧与格形がこの領域に特徴的な形のまま保存され、二重使用もそれによって構築されたが、二重使用が定着した後で前置詞の影響を強く受けたものと思われる。

以上より、2人称単数形・間接目的構文の分布から得た発達過程に関する推定は、ここでも確認できると考える。

2.3 固有名詞と二重使用の関係：男性名

例文 11) で紹介したように、固有名詞や限定された一般名詞を用いる場合、標準語では間接目的構文に前置詞 *na* の使用が義務的とされている。「マケドニア方言地図帳」は固有名の地域差にも注目しており、男性名では「ペトレ」(Petre :



図5 男性固有名「ペトレ」：間接目的構文「ペトレに(言った)」の構造

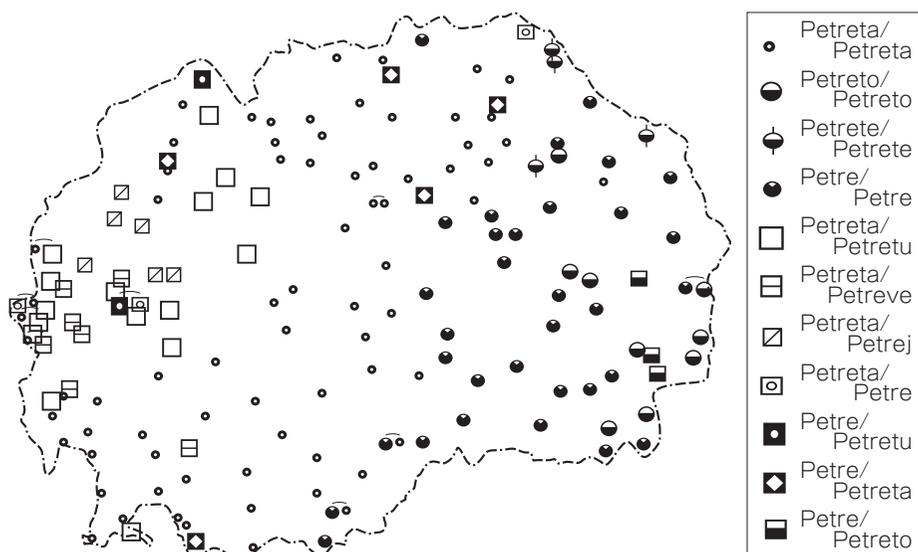


図6 固有名の直接目的／間接目的対比 「ペトレを見た」／「ペトレに言った」

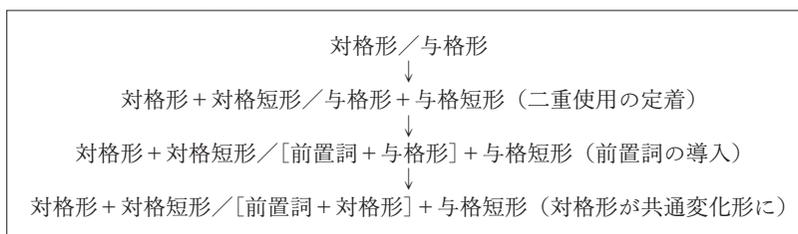
表3 固有名の直接目的／間接目的対比一覧

区別なし			区別あり		
直接目的	間接目的	出現数	直接目的	間接目的	出現数
○ Petre	○ Petre	33	○ Petre	▲ Petreta	5
			○ Petre	▲ Petreto	3
			○ Petre	□ Petretu	3
▲ Petra	▲ Petra	1	▲ Petra	○ Petre	1
			▲ Petra	□ Petretu	1
▲ Petreta	▲ Petreta	77	▲ Petreta	□ Petretu	18
			▲ Petreta	□ Petreve	7
			▲ Petreta	□ Petrej	6
			▲ Petreta	□ Petreve	7
			▲ Petreta	□ Petrej	6
▲ Petreto	▲ Petreto	9	▲ Petreto	○ Petre	1
▲ Petrete	▲ Petrete	5	▲ Petrete	○ Petre	1
	計	125		計	59

表中の記号は格区別を示したもので、分布図の記号とは無関係である

Petar の愛称形に由来) など広く使われるものが調査項目に含まれ、人称代名詞と同じく「ペトレを見た」「ペトレに言った」等、どのように使うかをきいている。二重使用・前置詞使用について知るには、代名詞と並んで重要な項目といえる。ただし、ペトレがキリスト教徒に固有の人名であるため、一部イスラム地域などで他

表4 格関係表現方法の推移



の人名が回答に含まれている。そこで、構文に注目する場合は語尾形式の共通性によって分類に含め、語形を見る場合は地図に含めないこととした。

直接目的構文では Petre go のように、旧対格の短形を重ねた二重使用がほぼ全域に分布し、安定している（図省略）。図5は間接目的構文である（出現が一例のものを除く）。まず注目されるのは、今日耳にすることの少なくなった格変化形の名残が多く得られていることである。格による対立があるかどうかを見るため、固有名部分の語形について、直接目的構文／間接目的構文に出現したものの対比を図6に示す。これらのうち、与格形に由来すると見なされるものは Petretu, Petrej, Petreve, 対格形は Petra, Petreta, Petreto, Petrete, 主格形は Petre となる。表3にまとめたように、左列に示した両構文で同じ形を使っているものは計125例、うち主格形33、対格形と思われるもの92である。それに対し、右列の「区別あり」の場合は、全59例のうち直接目的に主格もしくは対格形を、間接目的に与格形を用いたペアが49、主格と対格形の対比によるものが10となっている。「区別なし」、「区別あり」それぞれのうちとくに注目されるのは、前者で圧倒的多数を占めるのが対格形同士のものであること、後者では Petreta/Petretu など「直接目的＝対格形／間接目的＝与格形」のペアが約三分の一を占めることである。

Petre の語形のこのような地域差にもかかわらず、格機能との関係とその変化の方向は全領域で一致している。即ち、直接目的／間接目的の組み合わせで示せば、表4のような移行の流れが認められるのである。この流れは3人称単数男性の人称代名詞の場合と同じである。短形が付加されることによって格明示機能は専ら短形が担うようになり、それと連動して人称代名詞の長形や一般名詞は、文法機能を失って語彙的意味を示すだけになって行く。二重使用によって格関係の混同が避けられる環境が整ったために、「共通変化形」に移行する余地が生まれたと見られる。

この様子を分布によって確認してみよう。図7は3人称単数男性と「ペトレ」の間接目的構文について、前者は人称代名詞長形部分、後者は人名部分を取り出して

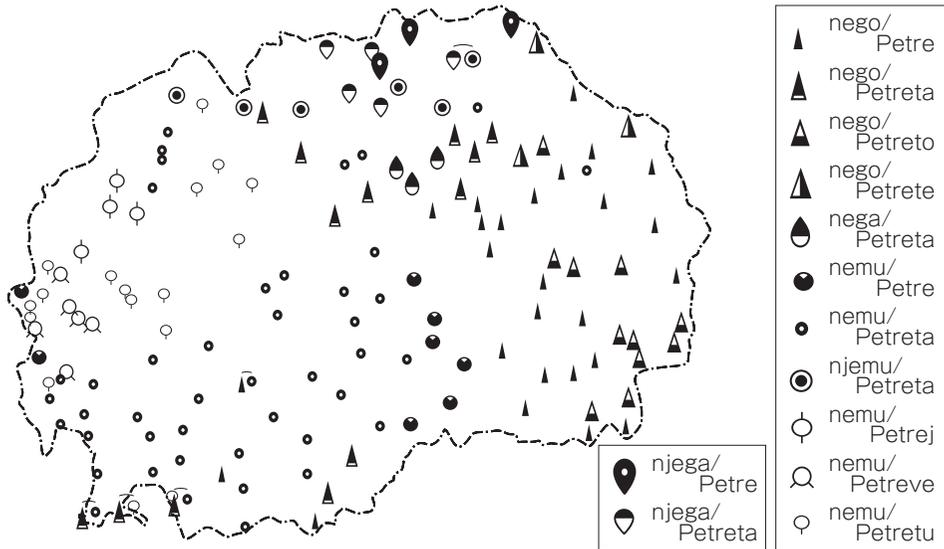


図7 間接目的構文3人称単数男性長形と「ペトレに」の人名部分の対比

表5 固有名の直接目的／間接目的対比一覧

3人称単数男性が旧対格形				3人称単数男性が旧与格形			
彼	ペトレを			彼	ペトレに		
nego	○ petre	3	28	nemu	○ petre	8	8
njega	○ petre	25		nemu	▲ petreta	45	52
nega	▲ petreta	15	25	njemu	▲ petreta	7	
njega	▲ petreta	6		nemu	▲ petretu	15	
nego	▲ petreta	4	nemu	□ petreve	6		
nego	▲ petrete	11	14	nemu	□ petrej	4	
nego	▲ petreto	3					
			67				85

表中の記号は格区別を示したもので、分布図の記号は無関係である。

対比したものである。表5が示すように、3人称単数男性形のみを見ると与格形の方が対格形より多くなっているが、代名詞と人名がともに与格形の組み合わせは、対格形を組み合わせたものの半分にしかならない。格システムの基盤が脆弱になるに従い、一般名詞の与格形から語尾変化の価値が失われ、格明示機能が他の要素に移行した結果、与格形は廃れて対格形が共通変化形として定着するようになった。一般名詞では人称代名詞より早く語尾から格情報が失われ、対格形の共通変化形が先行している。それに対して人称代名詞で与格形が保存されたのは、3人称単数男性形の場合はとくに、nego go/nemu muのように、リズムの良い短形とのセッ

トが運用をたやすくした可能性があるかもしれない。

2.4 男性形と連動する代名詞類

二重使用による人称代名詞の活用は人称代名詞以外の疑問代名詞や指示代名詞、「誰か」などの不定人称代名詞、さらには関係代名詞にも拡大している。これらの形式への拡大には不思議に思う点もなくはない。例えば疑問詞「誰？」は、対象となる人間が特定できていないし、「誰か」などは全く任意の人間を指すことが多いわけで、短形が付加できない場合ではないかと思われるのである。実際標準語の規範として、二重使用をどこまでどう活用するのかについては議論もあり、筆者が行った用例調査や談話資料収集においても、原則があるのかどうか判断に迷う例が多かった。以下、ここでの問題設定に従い、地域差に的を絞って見ていく。

2.4.1 疑問代名詞

まず、疑問代名詞「誰？」について見てみよう。図8、図9はそれぞれ、疑問代名詞 koj「誰」についての直接目的、間接目的各構文の構造を示したものである。構造を簡略化して見るため、細かい語形の異なりはタイプごとにまとめてある。直接目的構文においては二重使用の適用が3人称単数男性の人称代名詞と同じ程度に安定しているが、一部短形を伴わないものが点在している。変化の方向としては、旧対格形 kogo から主格形 koj への移行も把握できる。先に見た人称代名詞では直接目的構文で前置詞と旧主格形（基本形）の組み合わせは見られなかったため、その点が様相が多少異なる。しかし東部領域では、「主格形+短形」の二重使用が、短形を伴わない地点を囲んでいるように見えることから、この地域でも旧対格形 kogo との二重使用が浸透し、そのうち kogo が koj に入れ替わり、さらに短形が省かれるようになったと推定できる。とくに、kogo、koj 単独同士の併用だけでなく、kogo、koj go の併用がいくつか見えていることから、旧対格形と「基本形+短形」が同等の機能を持つ構文であると認識されているのは間違いなく、この地域にも二重使用が影響を与えたことがわかる。ただ、西部領域に点在する二重使用なしの地点と東部の kogo や koj がつながるのかどうかは、この分布だけから結論を出すことは難しい。

間接目的構文は人名「ペトレ」の場合のように、より複雑な分布を見せている。格システムが崩壊する前の旧与格形 komu がもとにあると仮定すると、与格形を用いた二重使用 komu mu がまず定着し、次に本体部分を対格形に替えた kogo mu

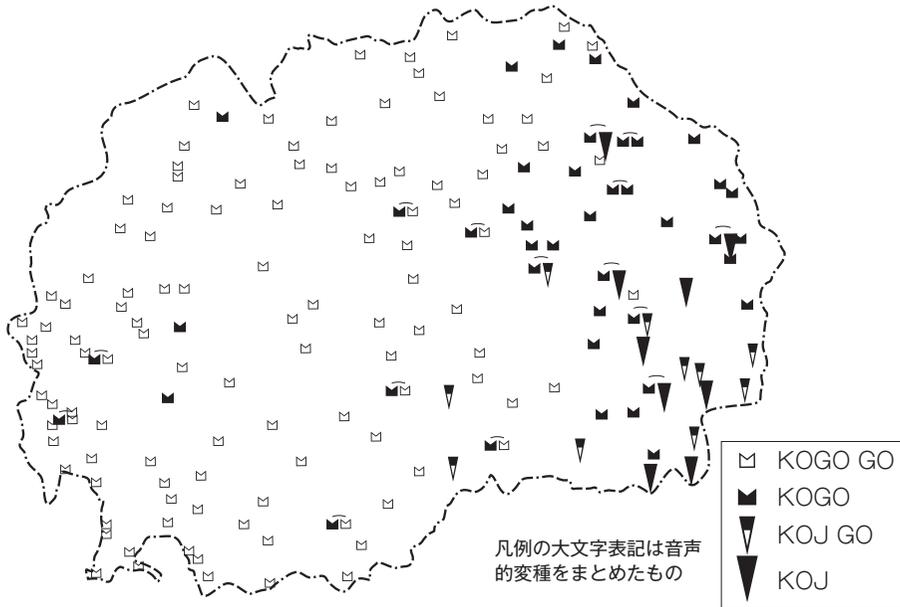


図8 疑問代名詞「誰」：直接目的「誰を」構造

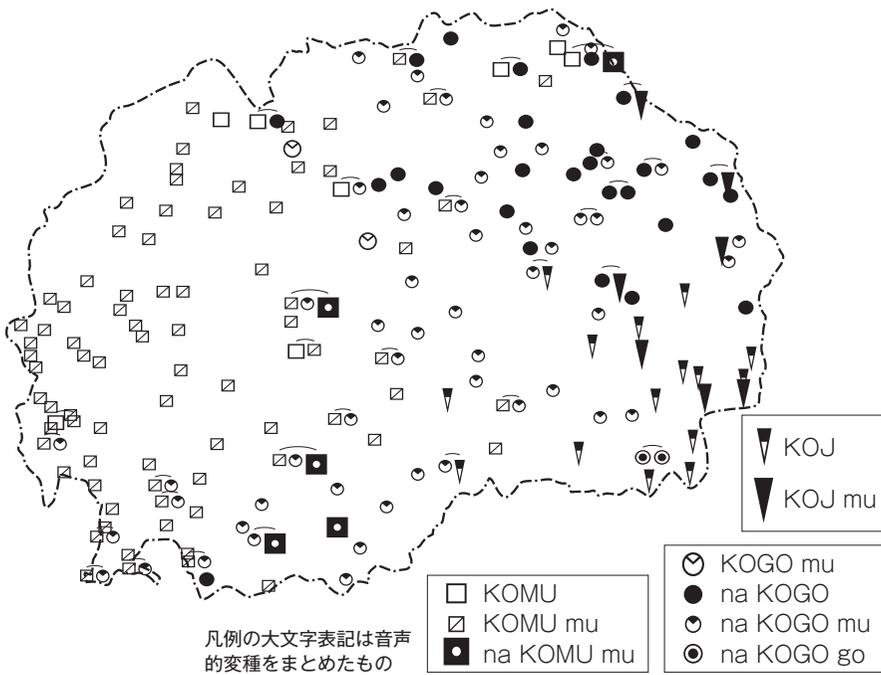


図9 疑問代名詞「誰」：間接目的「誰に」構造

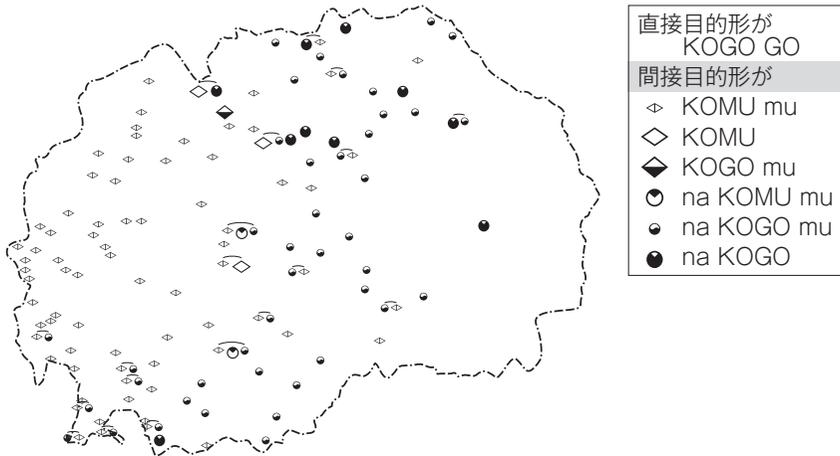


図 10 疑問詞「誰」：直接目的／間接目的の直接目的が KOGO GO のもの

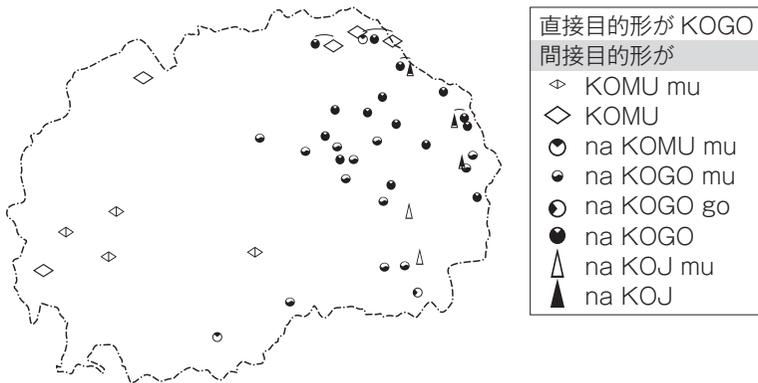


図 11 疑問詞「誰」：直接目的／間接目的の直接目的が KOGO のもの

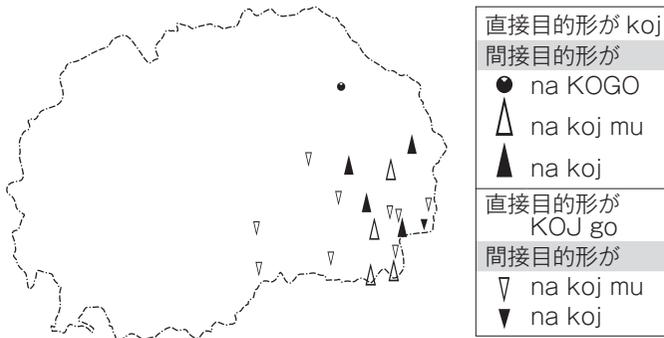


図 12 疑問詞「誰」：直接目的／間接目的の直接目的が KOJ のもの

ができたがあまり勢力を持たず、そこへ前置詞の影響が強くなった、それによりそのまま前置詞を付加した na komu mu が中央部に成立、しかし東部では前置詞によって与格形が不要となり na kogo mu が優勢となった。西部と東部の境界域に na kogo mu が多く、基本形に入れ替わったものにも na koj mu のような二重使用が見られる。こうした分布から見る限りでは、二重使用は東部領域にも浸透し、前置詞勢力との拮抗からさまざまな混淆形式が生まれたのだと考えられる。

構造を簡略に示した分布からは以上のような推測が可能だが、直接目的と間接目的の対立を確認してみたい。ただし3人称代名詞などに比べヴァリエーションが多く、両構文の組み合わせを一度に示すと煩雑になるため、直接目的の語形を基準に、図10~12のように3つの分布図に分けてみた。図10は直接目的に二重使用の kogo go が用いられている地点を選んだもので、直接目的/間接目的が kogo go/komu mu のように、長形・短形ともにもとの対格/与格の対立からなる二重使用が、東部域の狭い範囲を除き全体に安定して分布していることがわかる。そして、中央部から西部の南端部にかけては、長形の共通変化形への移行や、前置詞の使用などが加わったさまざまな組み合わせが分布している。この様相から、当該領域を囲むような形で南、及び東側に前置詞使用優勢の地域があって、中央部~西南端が二重使用との境界域となり、混淆を生じさせたと推測できる。次に図11は、直接目的構文に二重使用を伴わない kogo のみが使われている場合に限った分布である。ここでは前置詞優勢圏と見なした東部側でも、kogo/nemu mu のように、間接目的構文で長形が旧与格形 nemu のまま二重使用が適用されているものから、kogo/na kogo のように共通変化形となった kogo に前置詞を加えるだけで対立するもの、さらには主格形 koj に短形を付加した二重使用など、さまざまなタイプが見えている。また、図12は直接目的が主格形の koj の場合であるが、間接目的に二重使用を用いるところが目立っている。こうした様相から、現在は前置詞が優勢な東部地域にも二重使用が浸透し、そこへ前置詞の影響が覆うように広がっていったという推定が、ここでも十分に確認できると考える。

2.4.2 不定人称代名詞「誰か」

図13は「誰か」の直接目的構文の詳細を示したものである。ここに語形の詳細を示してみたのは、3人称単数男性系列として同じ旧生格=対格語尾となるはずの nego<toj, kogo<koj に比べ形態的に多様なためである。これは、この形が修飾語としても使われることから、代名詞としての独立性が低いためではないかと思われる。

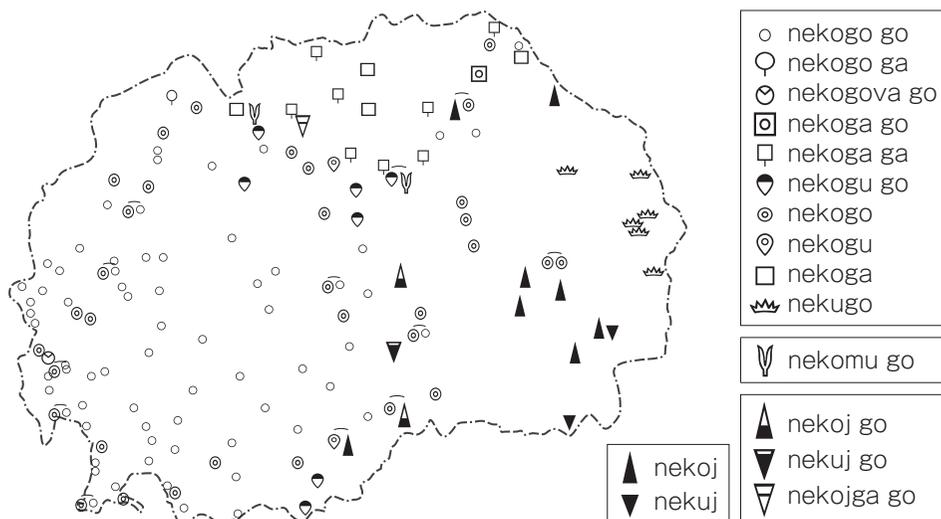


図 13 不定人称詞「誰か」：直接目的「誰かを(見た)」・語形詳細

回答の得られなかった地点が少なくないことも、同じ理由かと思う。

このように形態的には多様であるが、構造を整理するとこれまでの項目に比べ nekogo や nekoj が単独で使われる例が領域全体で多くなっていることが注目される。先述のように、特定の対象に限定しにくい「誰か」を指すのに、短形を付加するのは抵抗があるのかもしれない。興味深いことに、西部の二重使用地域に限って見ると、二重使用なしが中央部を囲んでいるように見える。この分布から次のような可能性が導かれる。即ち、「誰か」は不特定の対象者を表すため、他の形に二重使用が浸透してもすぐには適用されなかった。しかし西部の中心地域ではとくに二重使用の力が強まり、音声構造の類似もあって疑問代名詞や指示代名詞などほかの代名詞類との類推が働き、短形が付加されるようになったのではないか。もしこの仮説が成り立つとすれば、二重使用はまさにマケドニア西部の中心で生まれて周囲に広がっていったと言えるかもしれない。さらに、この中心域が発生源であるとする、これまでいくつかの分布にみえていた西端部の短形を伴わない形式が、古い形の残存である可能性も出てくる。

2.4.3 「彼に」「誰に」「誰かに」の関係

「誰」 koj, 「誰か」 nekoj は承接に際し 3 人称単数男性の扱いを受けるので、短形は go, mu など男性単数形と同じになる。音声面でも語尾が揃うので、上でも述べたが相互に類推作用が起こって変化に影響したのではないかと推測される。そこで

表6 「彼に」「誰に」「誰かに」各形式の出現数

「彼に」		「誰に」		「誰かに」	
na NEGO	5	na KOGO	26	na NEKOGO	29
na NEGO mu	73	na KOGO mu	60	na NEKOGO mu	53
		na KOGO go	2		
		KOGO mu	2		
NEMU	6	KOMU	10	neKOMU	18
NEMU mu	101	KOMU mu	82	NEKOMU mu	62
		na KOMU mu	5	na NEKOMU mu	9
				na NEKOMU	4
		na KOJ	7	na NEKOJ	16
		na KOJ mu	15	na NEKOJ mu	22

(出現数を見るため、併用はそれぞれ別個にカウントした。細かい語形はタイプごとにまとめ、大文字で示す)

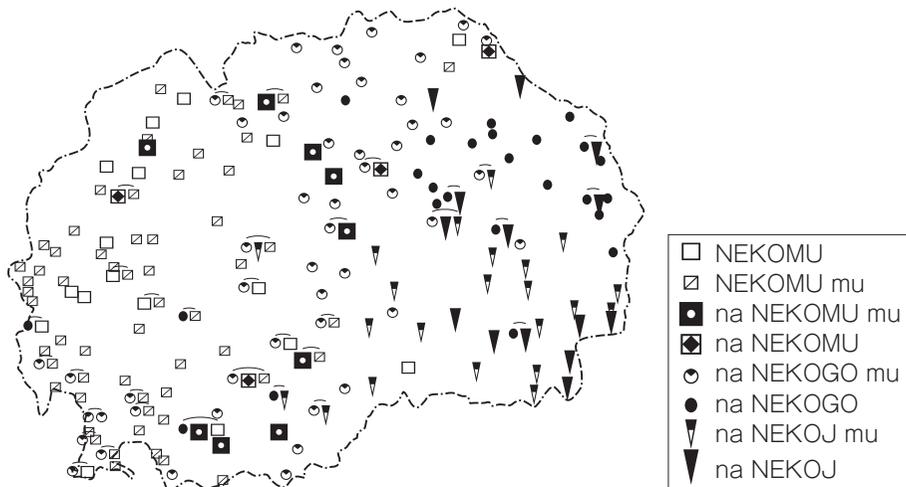


図14 不定人称詞「誰か」: 間接目的「誰かに(言った)」構造

これまでそれぞれ個別に分布を見てきたが、出現の数値面の違いを表6で確認してみる。3構文とも構造的には「前置詞+対格長形+与格短形」の二重使用形式と、「与格形+与格短形」が勢力を二分しているが、興味深いことにどちらについても「彼に」→「誰に」→「誰かに」の順に少なくなってゆき、それと反比例して主格形(基本形) koj, nekoj を用いるものが「誰に」→「誰かに」の順に増えている。また、数は多くはないが、本来の与格形単独のものがやはり「誰かに」に向かって多くなっている。この結果からも短形の付加が人称代名詞にまず定着し、疑問詞→不定人称詞へと順に浸透していったことが確認できる。疑問詞が二重使用構文に移

行する過程で前置詞使用の勢力が強まり、共通変化形使用が増え、短形を付加しない前置詞構文が増えた、と考えられる。

この結果をもとにもう一度分布を確認する。前掲の図9「誰に」では、na kogo と na kogo mu が隣接しており、na kogo mu が西部で優勢の komu mu と前置詞優勢域の間にあることから、東部領域にも二重使用が浸透してから前置詞の影響を受けたという流れが確認できる。本来の komu 単独型は主としてより格語尾認識の強い北部に見えていることから、二重使用が定着しきらないうちに前置詞の影響を強く受けたのではないだろうか。komu と na kogo の併用はそのためと思われる。図14は同様に「誰かに」について構造を示したものであるが、ここでは二重使用領域がかなり狭くなり、前置詞を用いた na nekomu mu が二重使用優勢地域と前置詞優勢地域の間に分布している。

以上より、音形も関連が認識されやすく、類似する形式でありながら、人称代名詞と疑問詞や不定人称詞は、大きな変化の方向は共通でも、流れのどの段階にあるかがそれぞれ異なっており、分布からもその違いが把握できる。また変化の段階差には意味上の扱いや、音形なども関係している可能性がある。

2.5 代名詞女性形

ここまでは単数男性形、および男性として扱われるものについて分布を観察し、変化の方向について仮説につながる解釈を施してみた。ここでは省略するが、1人称・2人称の複数形についてもほぼ同じような分布が得られ、筆者の推定する変化の方向について、同様に確認できる。しかし女性に関係する形式は、これらと比べてもかなり混沌とした様相を呈しており、解釈が難しい。

2.5.1 3人称代名詞単数女性形

人称代名詞女性形ではまず、男性形に比べ語形のヴァリエーションが多いことが目をひく。主格形（基本形）は標準語では taa であるが、図15に見るように、これと並んで ona（マケドニア、ブルガリア地域を除く他のスラヴ諸語ではこちらが主流となった）もよく使われている。この両系の形の併用は女性形に限ったことではないが、この分布でも併用が目立つ。標準語の t-形、on-形はともにもと「その」、「あの」のような指示代名詞・形容詞から派生しているが、taa/taja, ona/onaja については、分布からだけでは新古関係は決め難い。談話を利用した聞き取り調査では、「後者がより修飾語的で、人間を指していることを強めているように

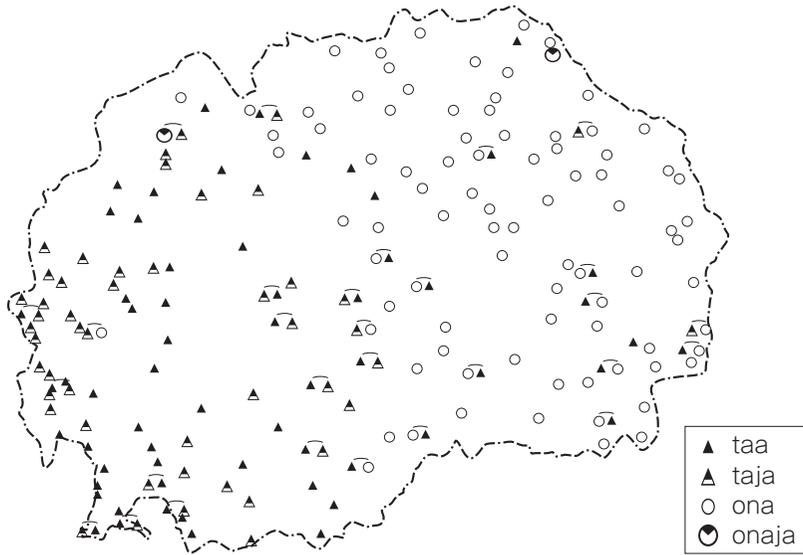


図 15 3 人称単数女性「彼女」：基本形



図 16 3 人称単数女性：直接目的「彼女を（見た）」

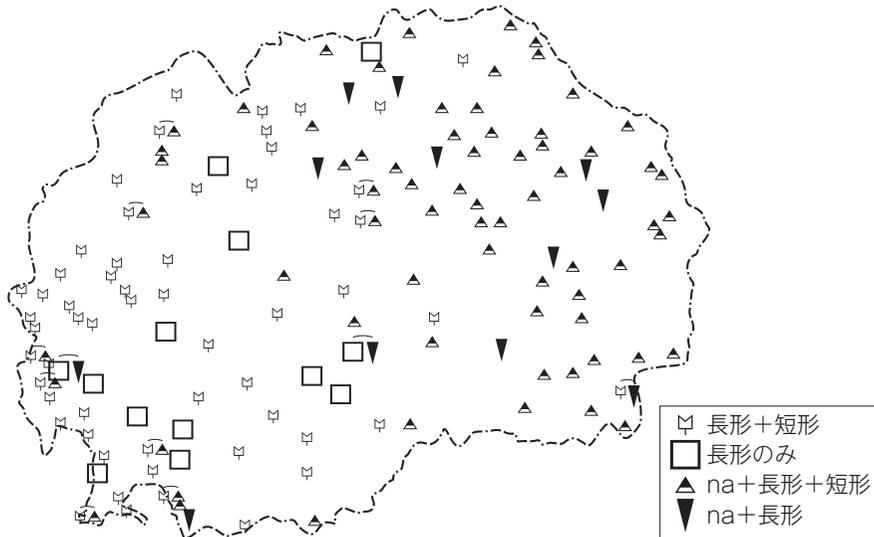


図 17 指示代名詞単数女性形「この(女)」: 間接目的 (tojze) 構造

響く」という情報もあったが、いずれにしてもそれだけこれらがもとの指示代名詞的性格から完全に脱していないことを示しているのではないと思われる。しかし女性形の場合それだけでなく、音声的ヴァリエーションが豊富なうえに、人称代名詞長形と短形の関係が見定めにくいものが多いのである。

図 16 の直接目的構文でも、標準語体系の *nea ja* が全領域的に優勢であるのは確かであるが、西部領域に標準形と短形のみ異なる *nea je* という組み合わせがまとまって分布している。また、長形 *njega* や短形 *ga, gu* のように、男性形と同一の形態を使用する地点も見られる。複数の形の併用が多かったり、回答が得られなかった地点が他より多くなっていることもあり、方言において人称代名詞・女性形という固有のカテゴリーが確立しているのかどうか、疑問と言えなくもない。

このように長形、短形ともに小さな領域に分かれる分布が目立つ女性形であるが、間接目的構文の構造はどのようになっているのだろうか。残念ながらもとデータは所在不明となっているため、参考としてこれと関連する指示代名詞「この人(女性)に(言った)」の項目を利用したのが図 17 である。女性形の独立性にも関わる問題であるが、語形的にも相通して同じ傾向と思われる。このように語形上の異なりを捨象して構造に焦点を当ててみると、構造そのものは、東部地域と西部地域の差ははっきりしているなど、男性形と分布の様相は大きく変わらないことがわかる。この問題はここで設定した変化プロセスの再興にとって、非常に重要な点か

と思うが、女性形についてもうひとつ別の観点から見ておきたい。

2.5.3 固有名詞と二重使用の関係：女性名

女性形の問題点をより詳しく見るために、男性形について試みたように、人名との二重使用の分布を観察しておく。利用するのは女性名「マーラ」(マリアの短縮愛称形)の項目である。男性名よりさらに例示されたのと異なる人名が多く、データ数も少なくなっている。

図 18 は直接目的構文「マーラを(見た)」, 図 19 は間接目的構文「マーラに(言った)」について示したものである。女性形ではこのように組み合わせが多様でかなり煩瑣な地図となる。そこで問題を絞ってみることにした。図 20 は人名部分について直接目的構文と間接目的構文に現れた語形を比較したものである。まとまった分布を持つペアとしては, Mara/Mari, Mara/Mare, Maru/Maru の 3 グループが目につく。南スラヴ諸語の格語尾に照らし合わせると, Mara の対格は Maru, 与格は Mari となり, Mare は生格にあたる。Mara/Mari, Mara/Mare グループの分布は前置詞なしの二重使用地域に含まれる。Mare が生格=与格同一化の結果この構文に使われるようになったのか, 単に音形の地域的変種であるのかは特定できないが, 機能としては間接目的構文のための与格と認識されていると見なされる。東側北部は既に述べたようにセルビア語につながる北部方言域に含まれ, 旧女性対格の -u 語尾が保存されているが, このまま前置詞構文に移行していることから, 対格形というより共通変化形として認識されていると考えた方がよいかもかもしれない。

ところで男性の人名 Petre は語尾が -e のため, 文法的ふるまいは中性扱いとなり, その結果 -eta という語尾が付加されて生格=対格を形成する。マケドニア語では Petar → Petre, Goran → Goce のように, 子音で終わる男性名が -e の短縮=愛称形を形成することが多い。こうした短縮=愛称形が正式名として固定的に使用されることも多く, 結果的に -e 語尾の男性名の頻度が高くなる。このタイプの男性名の多くが -ta 語尾の生格=対格を持ち, Petre/Petreta, Mile/Mileta のように, 語尾の付加によって形の違いがはっきりすることで, 男性名の格語尾残存度が高くなったのかもかもしれない。それに対して女性名は造格を除き -a/-e/-i/-u のように母音の交替のみによるため, それぞれの旧格区別を意識していると思われる狭い範囲を除くと, 全体には旧格語尾が保存されているとはいえない。

図 21 は短形について両構文を比較したものである。人名に比して短形のほうは逆に直接目的/間接目的の区別が意識されているものが多い。二重使用が浸透し始

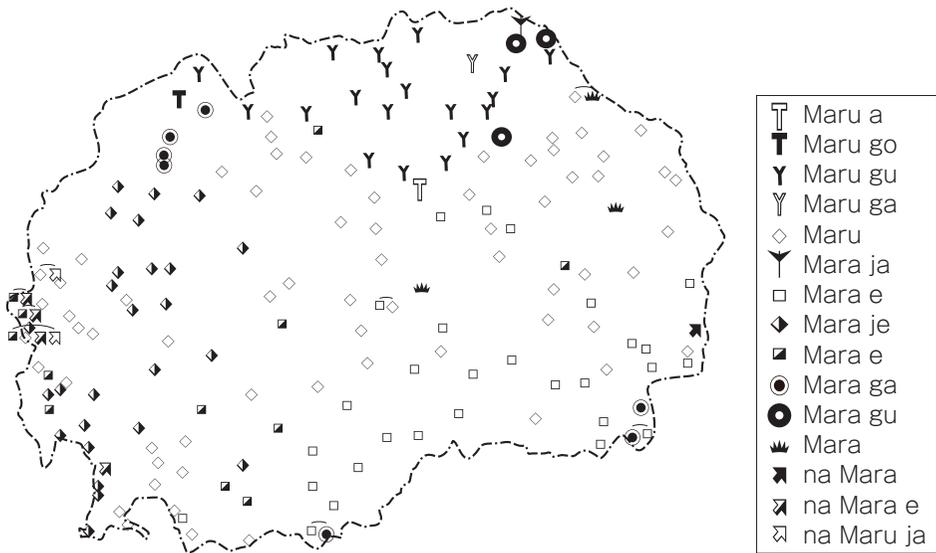


図 18 女性名「マール」：直接目的「マールを（見た）」

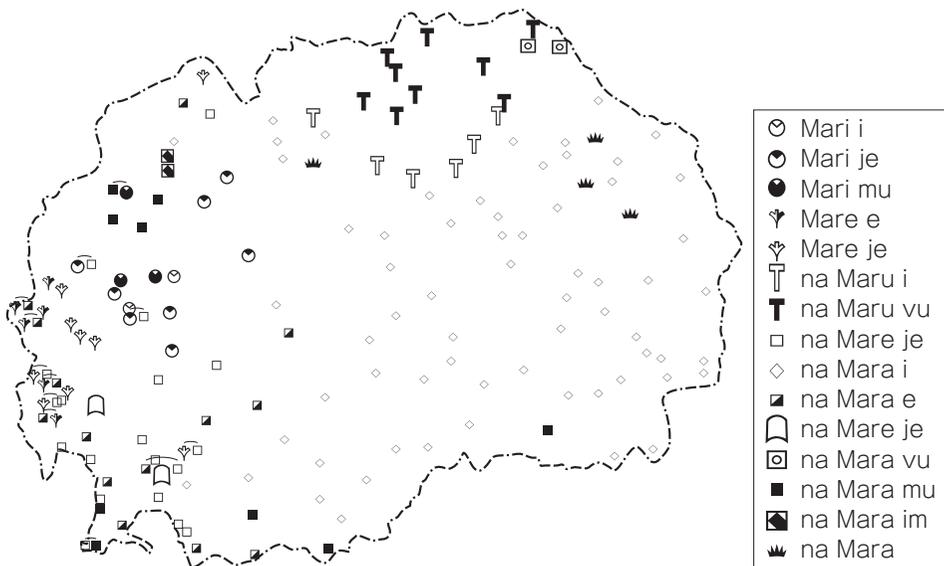


図 19 女性名「マール」：間接目的「マールに（言った）」



図 20 女性名「マーラ」：直接目的／間接目的・人名部分比較

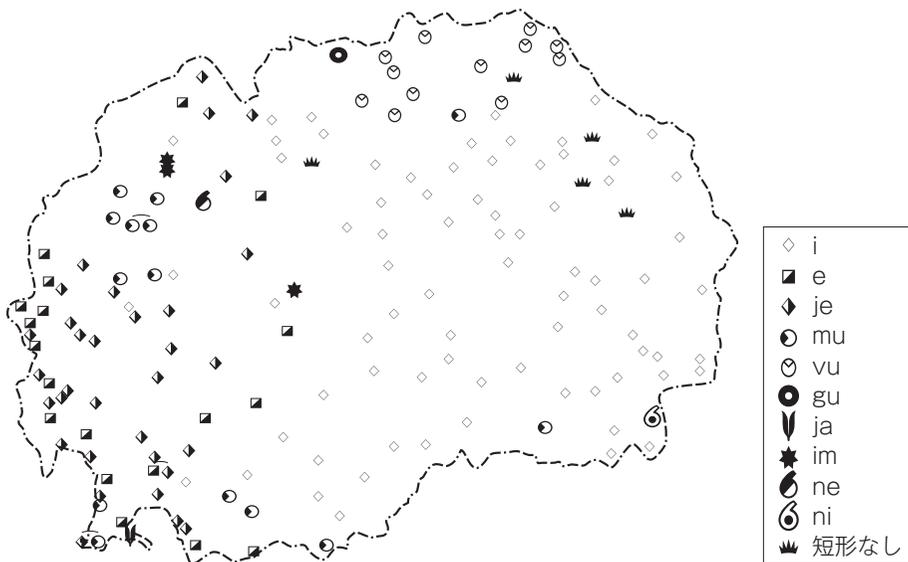


図 21 女性名「マーラ」：直接目的／間接目的・短形比較

めたとき、各地域はそれぞれの人称代名詞短形の変種を用いて新しいシステムに応用したので、形態的に受容したわけではないのである。

3 変化過程についての考察

本稿では人称代名詞およびそれに関係する項目についての言語地図の中から一部を紹介し、分布から変化過程の推定が可能であるという前提のもと、言語地理学的な解釈を試みた。それらの総合を通して、この地域の大まかな変化の流れとして、次のような仮説を提起したい。

- (1) 格システムの崩壊がどの部分から始まったかについて筆者は特定する材料を持たないが、方言事象分布において比較的安定しているのは生格=与格の曖昧化である。とくに使用頻度の高い人称代名詞1人称・2人称単数 mene/meni, tebe/tebi で先行して格関係の曖昧化が進み、他の語形にも順次広まって行ったと考える。
- (2) 生格=与格の曖昧化によって、もともと生格=対格であった男性単数形の運用に支障を来すようになった。「～を」／「～に」という直接目的／間接目的の区別は、生格/与格より言語運用上はるかに重要度が高いからである。
- (3) このように直接目的／間接目的の区別を明示化する新しい手段の必要が高まったことから、まだ格関係識別機能が失われていなかった人称代名詞短形が、その役を担うようになった。短形は単独で省略的に使うことができ、使用頻度が圧倒的に高かったことから、格機能が保持されやすかったと思われる。
- (4) このようにして短形の格マーカー機能が強まると、相対的に長形及び一般名詞の格認識はますます弱まり、西～中央部を中心に二重使用が定式化していった。1・2人称から3人称へと二重使用が拡大し、3人称の射程内で捉えられる一般名詞全体にその用法が浸透していった。
- (5) 短形の付加は人称代名詞長形との共起が発点となって発達したが、人称代名詞の性格上、長形部分を「代名」せずに元の人名に入れ替えることは抵抗なくできよう。しかし人名は固有名詞であり、あくまでも特定の対象に限られる。コミュニケーションにおいて直接目的／間接目的の曖昧化が問題を起すとするれば、とくに人間についての言及が必要な言語情報かと思われる。このような背景から、二重使用を固有名以外の一般名詞に適用する際には限定詞（後置冠詞）付きにな

る傾向が定着したのではないか。もっとも、筆者の談話調査等の結果によれば、この規範は口語では必ずしも絶対的とは言えないこともわかっている。

- (6) このことも含め、短形の付加と二重使用の定式化には他にもさまざまな問題が付随する。二重使用優勢地域では指示代名詞や疑問詞、関係詞など他の代名詞類にも用法が浸透していったが、「この～、あの～」のように限定を目的とする指示代名詞や、対象の描写を限定的に行う関係詞はともかく、「誰」であるかを問う疑問代名詞や、不特定の「誰か」にまで義務化しているのは不思議と言えなくもない。
- (7) 二重使用の適用がそうした意味的側面の原則のみに依拠しているかどうかについては、まだ検討すべき点がある。例えば、図 22 は二重使用の運用に際し、語順に明確な地域差が確認できたケースである。この地域差はアクセントの違いに関係している。西部側は語の末尾から 3 音節目に強勢が置かれる形式が大勢を占めているが、東部側は末尾から 2 音節目であったり、自由位置アクセントも聞かれる。代名詞短形は西部では動詞の前に置かれ、前置詞の有無にかかわらず $\bar{n}em\bar{u}_mu\ \bar{r}ekov$, $na\ \bar{n}ego_mu\ \bar{r}ekov$ のようなリズムを形成する。それに対して東部側では、一例として、動詞過去形（アオリスト過去）の語末子音が消えて長母音化し、短形を後に置けば語末から 2 番目というアクセントになるので、 $rek\bar{o}_mu\ na\ \bar{P}etre$ のようなリズムとなったりする。短形の付加がなんらかの音声的嗜好（と言ってよければだが）に関係している可能性についても長年検討を

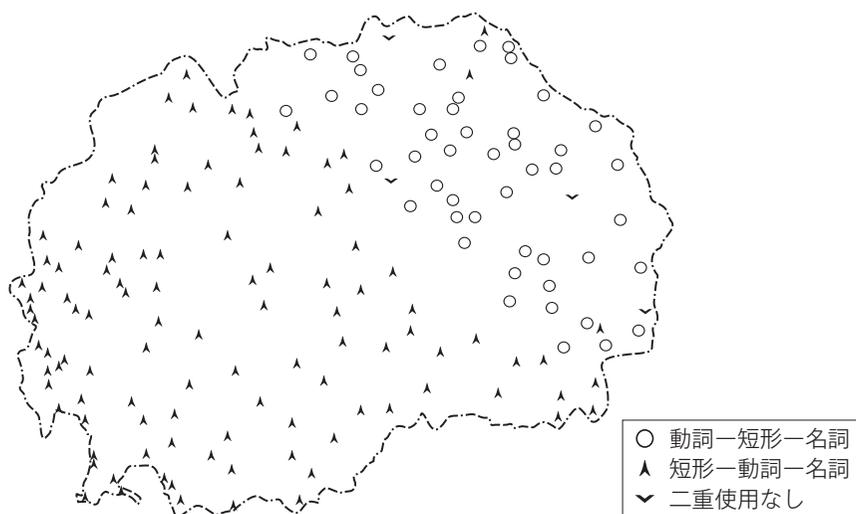


図 22 男性名「ペトレ」：直接目的「ペトレを」短形の位置

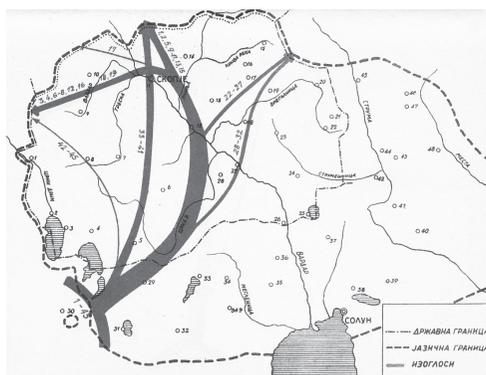
試み、談話調査などを実施しているが、まだ結論の域には達していない。

- (8) 標準語においてはすべての性・数について二重使用が規範化され、全体に均一なレベルにあるように見えるが、方言では女性に関する形式は安定しているとは言えない。上で述べたように、二重使用は生格=与格の曖昧化が男性名詞・代名詞有性物の生格=対格運用に支障を来したことが契機となったと考えれば、その問題に関係しない女性形への浸透が遅くなったことは理解できる。変化形に男性形が使われている地域もあることを考えると、女性という文法カテゴリーが人称代名詞システムに於いて確立しているのかどうか、疑問と言えなくもない。それも含め、地域ごとの変種が男性よりよく保存されていた段階で二重使用の影響が強まり、それらの変種をそのまま二重使用形式に取り込む形になった。そのため、変種間の発達関係の再興は難しい。
- (9) しかし注目すべきは、短形のこれほどの地域差にもかかわらず、二重使用という方式は確立している（とくに二重使用優勢地域では）ことで、その徹底は見事である。ここにこそバルカニズム形成の真髄があると言えよう。即ち、バルカン諸語が獲得した共通の文法特徴は、いずれもそれぞれの言語の素材によって運用されている。新しい文法形式は素材そのものの伝播ではなく、方式だけが取り入れられたわけで、いわば調理方法だけが伝わって各地域の素材をそれぞれ独自に料理する、といった形である。本稿で扱ったデータの中では、煩瑣な分布を示す女性形がかえってその様子を生き生きと伝えていることがわかる。
- (10) マケドニア西部地域を「バルカニズムの最もコアな地域」、と表現する研究者も多い。バルカニズム現象のすべてがこの地域から発信されたと言えるかは疑問だが、少なくとも二重使用についてはその可能性が高いことが、分布からわかる。そして、二重使用優勢地域と前置詞優勢地域の境界地帯に出現する混淆タイプの中に、二重使用に前置詞をさらに重ねたタイプが少なからず分布していることから、東部では二重使用が浸透し十分に定着する前に前置詞の強い影響を受けたと推定される。与格表示を前置詞で担う形式は、本稿で扱った領域外の、東～南にかけて囲む広い地域に広がり、対象地域の東側に流入した可能性が高い。
- (11) na はスラヴ諸語に共通の前置詞で、空間に関係する用法（平面の上に置く、いる、など）や、時間の長さや分量に関係する用法が基本である。しかしこの地域では生格が担っていた「所属」や、与格が担っていた「～に（対して）」まで広い意味をカバーするようになった。この二つの格関係がともにnaによって担われるようになったのも生格=与格の同一化によるもので、平面への移動「～

へ」が「～に対して」という関係概念に拡大し、そこから「～に対して（関係のある）……」という意味拡張が起こって「所属」に使われるようになったのではないだろうか。この地域でいわゆる所有与格が活発であることも、naの意味拡張の方向を示唆するものである。

- (12) naの意味拡張は全域に起こったが、西部～北部地域では生格＝与格の同一化が進行しても、人間についての間接目的用法については、与格形の使用が長く維持された。特に短形の格認識が失われなかったことが、二重使用の発達を促したものと思われる。

本稿で明らかとなった二重使用優勢地域と前置詞優勢地域は、ここに現れた等語線の束によって区分される西部方言／東部方言領域にはほぼ一致する。より広い領域の中で現マケドニア中西部方言がどのような位置にあるかがわかる。



参考図 旧「マケドニア」領域全体で見る方言区域 (Видоески 1962/63 による)

注

1. 「現代マケドニア語文章語」と称される標準語は、1945年、旧ユーゴスラヴィア連邦共和国の構成共和国として独立した際に成立。西～中央部諸方言を母体に制定された。なお、「マケドニア」という名称は古代からの地名を継承したもので、民族的にはバルカン半島に南下して定住したスラヴ民族の末裔とされる。国家の名称をめぐるギリシアとの間に対立があり、国連の暫定承認名は「マケドニア・旧ユーゴスラヴィア共和国」。マケドニア語は、共和国人口200万の約3分の2を占めるスラヴ系住民の母語と見られる。
2. セルビア語、マケドニア語ともに、セルビア語（クロアチア語）のラテン文字式表記法に従う。即ち、č, š, ž等の補助記号付文字を口蓋化系列（チュ、シュ、ジュ等）の子音に用い、jはiの半母音を表す。
3. バルカニズムのひとつと見なされ、周辺諸言語にも観察される。スラヴ語である東隣のブルガリア語も同じ形式となるが、二重使用が強調文となる場所に違いがあるとされている。
4. マケドニア語の定冠詞はやはりバルカニズムのひとつであり、指示代名詞「この」が名

詞（形容詞など修飾語のある場合は修飾語）末尾に後節するもので、用法は英語等の定冠詞と一部を除き基本的に共通である。マケドニア語では3種の指示代名詞がすべて冠詞として接続する用法を持つ。

5. 「マケドニア地図帳」調査は共和国領域外に存在するマケドニア語話者居住集落も広く対象としている。変化過程の解明のためには当然ながらより広い領域について地図化するべきであるが、調査項目、調査方法、地点網の設定など、国内領域とは調査自体のレベルが異なっているなどの問題があり、現段階では分析対象に含めていない。限定した領域内について詳細に分析し、ある程度変化過程が推定できれば、他領域との比較によって仮説を検証したい考えである。
6. 調査データを「マケドニア語方言地図帳」データとする。調査の概要、調査項目等の詳細については参考文献 Видоски, Б. (2000) に詳しい。なお、調査データはマケドニア語研究所が保管している。筆者に資料利用を許可して下さった故ヴィドエスキ教授、及びマケドニア語研究所の長年のご支援に感謝したい。
7. 国立国語研究所の大西拓一郎氏が公開しているプログラム。Adobe社のIllustratorにプラグインを組み込む方式をとっている。言語地図作成にはどのような地図を目指すかによって研究者ごと、さらには国ごとにスタイルがあり、統一的な技術開発は容易ではないが、国立国語研究所方式では市販のソフトに独自のプログラムを組み込んで使うため、比較的安価な投資で済み、基本的技術もソフト操作の習熟によってクリアできる利点がある。その一方でソフトのバージョン・アップへの対応が課題であり、現時点でAdobe CS5.5までしか対応できていない。また、地点ごとの情報を重視するには優れている反面、領域・区画の明示は容易でないという側面もある。

参考文献

Видоски, Б.

1960. Основни дијалектни групи во Македонија. Македонски јазик, XI–XII, pp. 13–31.

1962. Македонските дијалекти во светлината на лингвистичната географија. Македонски јазик, XIII–XIV, pp. 87–107.

1965. Заменските форми во македонските дијалекти. Македонски јазик, XIV, pp. 25–71.

1999. Дијалектите на македонскиот јазик, т. 1, т. 2, Скопје.

2000. Прашалник за Собирање Материјал за македонскиот дијалектен атлас. Институт за македонски јазик “Крсте Мисирков” Скопје.

2000. Текстови од дијалектите на македонскиот јазик. Скопје.

Институт за македонски јазик “Крсте Мисирков”.

2001. Македонскиот глагол синхронија и дијахронија. Скопје.

2008. Македонски дијалектен атлас, прокегомена, Скопје.

Конески, Б. 1967. Граматика на македонскиот јазик. Скопје

Марковиќ, М. 2000. Преглед на македонските дијалекти. Центар за ареална лингвистика (Македонска академија на науките и уметностите). Скопје.

Накацима, J.

1998. Употребата на личните заменски форми во македонскиот јазик од дијалектолошка гледна точка. *Comparative and Contrastive Studies in Slavic Languages and Literatures* (Japanese Contributions to the XIIth International Congress of Slavists). University of Tokyo. pp. 89-112.

2008. Типови заменска употреба во југоисточниот дел на јужнословенската јазична област. *Comparative and Contrastive Studies in Slavic Languages and Literatures 2008*, Japanese Association of Slavists, pp. 42-59.

中島由美 1995. 「マケドニア語人称代名詞体系の変化に関する一考察」『東京大学言語学論集』14, pp. 319-338

Solta, G. R. 1980. Einführung in die Balkanlinguistik mit besonderer Berücksichtigung des Substrats und des Balkanlateinischen. Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt.

Sandfeld, K. 1930. Linguistique balkanique, Paris.

Танкуровска (Ѓоргиевска), Л. 1998. Директниот и индиректниот објект во јазикот на македонските афтори од XIX век. Скопје.